



ほほえみだより

笑顔いっぱい 生き生き
今日も来てよかった治田東の子ども

栗東市立治田東小学校

第12号

令和6年2月28日

確かな「節目」をつくるとき

木々の芽も膨らみ、日ごとに春の息吹が感じられる季節となりました。玄関近くの梅がピンク色に美しく咲いています。今はまだ固い校庭の桜の蕾も、少しずつ膨らんでいくのが楽しみです。

さて、今年度も卒業証書授与式(3月19日)、修了式(3月22日)で終わります。そして、4月からは新しい出会いと新学年が始まります。言ってみれば、ゴールしてすぐにスタートする…それが学校です。どうして、学校はこの学年の区切り、節目(ふしめ)をつくっているのでしょうか。友だちや教員との出会いを1年限りのものとし、せつかなじんだ者同士を離すしくみは何のためにあるのでしょうか。

もし、学年の区切りがなかったらどうでしょう。6年間ずっと続く日々の生活、同じ教室の中で、同じ人間関係の中で、緩やかな坂道を少しずつ上る毎日…。それは、ステージが変わらないゲームのように、マンネリで退屈なものになっていく気がします。学校の学年の区切りは、本当は、昨日、今日、明日…という連続した月日の移り変わりではないこの時期に「卒業式」「修了式」という儀式で変化をつけ、子どもたちを成長させる仕掛けなのかもしれません。ですから、学年の変わり目のこの時期は「節目」という言葉をよく使います。

子どもたちは今、「もうすぐ1年生が終わる」「この仲間と一緒にいられる時間はもう少ししかない」と、これまで以上に学校生活の1日1日を大切に過ごしています。同時に4月から始まる生活に不安を抱いている子どもも少なくないでしょう。

そんな子どもたちを、いたずらに「別れ」や「終わり」という言葉で、センチメンタルにさせるだけでなく、子どもたちに今の学年を振り返らせ、良いことも悪いことも思い出としてリセットさせること、「2年生になるのだから」「6年生になったら」と、次の学年に向けた希望や期待をもたせることがとても大切です。自分自身の成長を確かめさせること、そして、たくさんの力を身に付けた自分に自信と誇りを持てるようにしていくこと、それが今そばにいる大人の役割であると思います。

私たち教職員も、全ての子どもたちが次の学年、学校へ安心して進めるように、これまで以上に会話を大切にしながら、3月を過ごしていきます。ぜひ、ご家庭でも会話を大切にお過ごしください。



わかばっこの
ささやく※



「6年生を送る週間」が始まった2月22日(金)の朝に校門前に5年生の子たちが立ち、「卒業おめでとうございます」と、大きな声で元気よく呼びかけていました。6年生を送り出す気持ちを伝えるために、29日に「6年生を送る会」があります。各学年で当日に向けて練習する姿や5年生が「おめでとうあいさつ」や「昼休み遊び企画」などの役割に分かれて取組を進めています。「6年生のために」がんばる5年生、次の最高学年として大いに期待できます。

※このコーナーは、日常生活の中での子どもたちの様子から感じたことをささやくコーナーです。

